

ポーヴォワール著作集

8

『ダラン＊

Les Mandarins

ポーヴォワール著作集：第8巻

レ・マンダラン *

*This book is published in Japan by arrangements with
Gallimard through Bureau des Copyrights Français.*

© Editions Gallimard

初版発行日 1967年6月20日
重版発行日 1975年8月15日

訳者 朝吹三吉

発行者 渡辺睦久

装幀者 真鍋 博

印刷所 小林印刷所

製本所 坂井製本所

(分)0397(製)011008(出)3266

株式
会社 人文書院

京都市下京区仏光寺高倉 TEL (351) 3343・3391

ボーヴォワール著作集 第8巻

*

目次

第一章	7
第二章	77
第三章	122
第四章	252
第五章	343

レ・マンダラン



ネルソン・オルグレンに

第一章

I

アンリは、もう一度、空へ眼をやった、——黒水晶のような空。千機もの飛行機がこの静寂を掻き乱していうとは、容易に想像することができなかった。しかしそれにもかかわらず、幾つかの言葉が彼の頭の中で喜ばしい音を立てておつかり合っていた、——敵の攻撃撃退さる、ドイツ軍総退却開始、おれは間もなく出発することができるぞ……。彼はセーヌ河岸の街角を曲った。そう、街々は香油とオレンジの花の匂いがするだろう、人は煌々と燈火のついたキャフェーのテラスでおしゃべりをしてゐるだろう。彼はギターの音を聞きながら真物のコーヒーを飲むだろう……。彼の眼も、手も、皮膚も、飢えていた——何という長い断食だっただろう！彼は凍てついた階段をゆっくりと登っていった。

「ああ、やっと帰っていらったのね」ポールが彼を抱きしめた、あたかも長い危険の後で彼に再会したかのよう。彼は彼女の肩越しに、向い合った大きな鏡が無限にその姿を映している、デコレーションのついた樅の木を眺めた。テーブルの上には皿やコップや酒壺がぎっしりと並んでいた。寄生木や杉の枝が踏台の傍の床に幾つも散らばっていた。彼はポールの腕から抜け出して、外套を長椅子の上に放り出した。

「ラジオを聞いたかい？ 素晴らしいニュースだ」

「まあ！ 早く聞かせて！」彼女は決してラジオを聞かなかった。どんなニュースでも彼の口からでなければ知ろうとはしなかったのだ。

「今晚がどんなに明るい晩かということに、君、気がつかなかったかい？ ルントシュテット軍の後方に味方の飛行機が千機も繰り出しているって話だ」

「まあーじゃ、もうあいつたちは戻っては来ないのね」
「無論だよ、奴らが戻って来るなんてことは初めから問題じゃないさ」

正直に言うとは、敵がまた戻って来るかもしれないというのを、彼も考えたことがあったのだった。

ポールが意味ありげに微笑んだ、「わたくし、万全の策を講じて置いたのよ」

「何だい、万全の策って？」

「この建物の地下室の奥に小さな物置部屋があるのよ。わたくし、管理人にその部屋を片付けてもらうように頼んだの。あなたがそこに隠れられるようにと思って」

「そんなことを管理人に話すべきじゃなかったね。そういうことから恐慌が起るんだよ」

ポールは左手で彼女の肩掛の端をしっかりと握りしめていた。まるで彼女の心臓を護っているような様子だ。

「でも、あなたはあいつたちに銃殺されるかもしれないなかったじゃないの。わたくし、今でも毎晩、夜中に、あいつたちの声が聞こえるのよ。あいつらが扉を叩く、わたくしが開ける、するとそこにあいつらが立っているの」

じっと立ったまま、両眼を半ば閉じて、彼女はほんとうに何かある声を聞いているように見えた。

「そんなことはもう決して起こらないさ」とアンリは快活に言った。

彼女は眼を開き、両手を下に垂らした。

「戦争はほんとうに終わったの？」

「もう長いことはない」アンリは天井を横断している太い大梁の下に踏合を持って行った。

「手伝おうか？」

「デュブロイユ一家がもうじき手伝いに来てくれるはずだわ」

「なにも彼らを待つこともないじゃないか」

彼が金槌を手にとると、ポールが彼の腕に手を置いた

——「仕事はなさらないの？」

「今晚はしないよ」

「あなたは毎晩そうおっしゃるのね。あなたが何もお書きにならなくなってから、もう一年以上になることよ」

「心配するなよ。ぼくは書きたくってうずうずしているんだから」

「あなたは新聞のお仕事のために時間をとられ過ぎているのよ。ごらんさい、何時にあなたがお帰りになるか。きっとまだ何もあがっていないでしょう。お腹空いてない？」

「まだ空いてないね」

「疲れているんじゃない？」

「そんなことはないさ」

このように、彼女の配慮にみちた眼差で食るように見られる時、彼は自分が何かこわれやすい、危なっかしい貴重な宝物であるような気がするのだった。これこそ彼を疲れさせることだったのだ。彼の踏台の上に登り、そして、用心しながら釘を打ち始めた。この家はあまり新しくはなかったのだ。

「どんなものを書くつもりか、君に話せるほどになっているんだ。今度のは陽気な小説だ」

「まあ、どういう意味ですの、それ？」とポールが不安げな声で訊ねた。

「今言った通りのことさ。ぼくは陽気な小説を書きたいと思っているんだよ」

もう少しで、彼は即席にその小説を創り上げるところだった。声に出してその小説について考えをめぐらすことは彼にとっても興味のあることだった。しかしポールがあまり熱烈な眼差で彼を見つめていたので、彼は言うのをやめてしまった。

「その大きな寄生木の枝を取ってくれないか？」

彼は、その白い玉のたくさんついた緑色の丸い枝を使い心しながら梁に懸けた。ポールが彼に新しい釘を手渡しただ。そうだ、戦争は終わったのだ。少なくとも彼にとって……。今晩はほんとうの祝賀のパーティーなのだ。平和はまさに始まろうとしていた。すべてが再び始まろうとしていたのだ、喜びのパーティー、閑暇、旅行、ことによったら幸福が、そして疑いもなく自由が……。彼は梁の端から端まで、寄生木や柊や銀色のピカピカした花飾りなどを懸けおえた。

「どうだい？」と彼は踏台から降りながら訊ねた。

「素敵だわー」彼女は樅の木のをばへ行って、蠟燭を一本真直ぐに起こした。「危険がもうないとすれば、あなた、ポルトガルへいらっしゃる？」

「勿論さ」

「じゃ、旅行の間もお仕事はなさらないわけね？」

「多分そうだろうね」

ポールは樅の木の枝に吊下がっている金色のガラス球を、何事かを言い出しかねた様子で、いじくっていた。

彼は彼女が待ち受けていた言葉を口に出した。

「君を連れて行けないで、悪いね」

「それがあなたのせいじゃないっていうこと、わたくし、

よくわかつていてよ。悪くなんかお思ひにならないでいいのよ。わたくし、この頃ますます旅行して歩きたいなんていう氣持がなくなつて来たわ。旅行なんかしたつて何になるでしょう」彼女は微笑んで、「わたくし、お歸りをお待ちするわ。待つということも、安全なことがわかつてゐる場合は決して厭なことではないわ」

アンリは大声で笑い出したくなつた。何になるか、だつて？ 何たる考えだ！ リスボンヌ。ポルトー。シントラ。コインブラ。何という美しい名の市々ままだろう！ しかも、彼にとつては、歓喜の情で胸が一杯になるのを感じるのは、別にそれらの名を口にする必要さえなかつた。彼にとつては、ただ、おれはやがてここにはいないだろう、どこかよそにゐるだろう、と心の中で思うだけで充分だったのだ。よそ、この言葉は最も美しい地理上の名前よりも更に一層美しい言葉だったのだ。

「そろそろ、着替えたらどうだい」と彼は言った。

「ええ、そうするわ」

彼女が寢室へ通じる階段を登つて行つてしまうと、彼は食卓のそばへ行つた。考へて見ると、彼は腹が空つてゐた、しかし彼が空腹だと言へば、ポールは忽ち不安の念に顔を曇らすに決つてゐるのだ。彼はパンの上に肉の

パテを一片かたのせて、それにかぶりついた。彼は心の中で決然と咬いた、「ポルトガルから歸つたら、断然ホテルに住むぞ」と。夕方、誰も待つていない部屋に歸つて行くということは実に氣持のいいことだ！ 彼がまだポールに惚れ込んでいた頃でさえ、彼は常に自分だけの部屋を持つことを固執したものだ。ところが、一九三九年から四〇年にかけて、彼が召集されてゐた間、ポールは毎夜、滅茶滅茶になつた彼の死骸の上に氣絶して倒れる、ということが繰り返されたのだ。彼が無事に彼女の許に返された時、彼としては何であろうと彼女の願ひをむげに斥ける勇氣は持てなかつたのだ。それに、燈火管制下では共同生活が何かと便利だった。「いつでもほかへいらつしゃつていいのよ」と彼女は言つてゐたが、彼はまだ実現できないでゐたのだ。彼は酒瓶を一つ掴み、栓拔をキイキイと鳴るコルクの中に突込んだ。一月も経てばポールは彼なしの生活に馴れるだろう、しかし、もし馴れなかつたとしても、やむを得ない。フランスはもはや牢獄ではないのだ、国境は四方へ開かれつつあり、人生ももはや牢獄であつてはならなかつた。四年にわたる節制苦行、他人のためにのみ辛勞した四年間、それはたいへんなことであり、もう充分だった。少し自分のこ

とに心を遣ってもいい時が来たのだ。そしてそのためには独りでいること、そして自由であることが必要だった。四年間もの中断の後で、自分自身をはっきりと掴むということは決して容易ではないだろう、彼が自分の中ではっきりさせるべき事柄は山とあった。たとえばどんな事か？ 実を言うとな彼にもそれが何であるか明瞭にはわからなかったが、しかし、あちらで、香油の匂う路地を当てもなく歩き廻りながら、自分の精神状態の測定をやってみよう。またもや彼は心に衝撃を感じた——空は青々と晴れているだろう、窓々には乾し物が風に吹かれているだろう。彼は歩くだろう、両手をポケットに突込んで、旅行者として、彼とは異なる言葉を話し、その心配事が彼には関係のない人々のさ中を。彼は自分自身を心ゆくまで生きるに任せるだろう、彼は自分が生きるのを感じるだろう。ことによったらそれだけで、すべてが明瞭になるのに充分かもしれない……。

「まあ、親切ね。瓶の栓を全部抜いておいて下さったのね！」ポールがしなやかに小刻みな足取りで階段を降りて来た。

「君はもう紫色以外は絶対に着ないんだね！」と、彼はにやっとしながら言った。

「あら、でもあなたは紫色がお好きじゃないの」とポールが言った。彼は十年このかた紫色が大好きだったのだ——十年、それは長い年月だ。「あなた、この服（ドレス）、お気に召さないの？」

「いや、とても綺麗だよ」と彼は声を励まして言った。「ただ、ほかにも君に似合う色があるだろうと思っただけさ。たとえば緑とか」と、彼は出まかせに言ってみた。「緑ですって？ わたくしが緑を着ているところ、想像できる？」

彼女は途方にくれた様子で鏡の前に立ち止まって、じっと自分の姿を見つめた。しかし、それは実に無益なことだった！ 緑であろうと、黄色であろうと、どんな色の服を着ようとも、彼女は、十年前に、無頓着なしぐさでその長い紫色の手袋を彼のほうに差し出して、彼に感情を起こさせた、あの彼女とすっかり同じ女として彼の眼に映ることはもう決していないだろう。彼は彼女に向って微笑して言った、「踊らないか」

「ええ、踊りましょう」と言った彼女の声があまり熱烈だったので、彼は一層しらけた気持ちになった。彼らの同棲生活はこの一年の間あまりにも陰鬱なものだったので、ポール自身さえ厭気がさしていたようだった。ところが

九月の初めに彼女は急に心境に変化を來たし、今では彼女のあらゆる言葉や接吻や眼付に、情熱的な顫動が感じられた。彼が彼女の腰に腕を廻すと、彼女はびったりと身を寄せて唄いた、

「憶えていらっしゃる？ わたくしたちが初めて一緒に踊った時のこと？」

「パゴードでだったね。憶えているとも。君は僕の踊りがとても下手だと言ったね」

「あれはわたくしが、グレヴァン博物館にあなたを案内した日よ。あなたはそれまでグレヴァン博物館をご存じなかったわね。あなたはあの頃何にも知っていらっしゃらなかったわ」と、彼女は優しく感動した声で言った。そして顔を彼の頬に押し当てた、「あの時のわたくしと二人が眼に浮かぶわ」

彼もまたその時の自分を思い出していた。二人は「幻影の間」の中央の台の上に登っていた、そして彼らの周囲の四方の鏡に、寄り添った二人の姿が円柱の林の間に無限に映っていた——彼女が言った、「ねえ、わたくしが女の中でいちばん美しい女だとおっしゃって頂戴。——君は世の中でいちばん美しい女だ——そしてあなたは世界でいちばん偉い男の方におなりになるのよ」……彼

は大きな鏡の一つに視線を向けた——そこには抱き合った二人の姿が樅の木の列に沿って無限に続いていた、そしてポールがうっとりとした様子で彼に向って微笑んでいた。いったい彼女は、今ではそれがもう同じ「対」の男女ではないということに気がついていないのだろうか？

「誰かが戸をノックしたよ」とアンリが言った。そして、急いで戸口のほうへ行った。それはバスケット類をたくさんかかえたデュブロイ一家だった。アンヌは両腕にしっかりとばらの花束をかかえ、デュブロイは赤い西洋唐辛子の房を肩にかけ、ナディーヌはつまらなそうな顔をして二人の後についていた。

「クリスマスお目出とう！」

「クリスマスお目出とう！」

「ニュース聞いたかい？ 空軍がとうとう偉力を発揮したよ」

「うん、千機もだってね」

「奴らは一掃された」

「これでいよいよお終いさ」

デュブロイがその一抱えもある赤い果実を長椅子の上に置いて言った、「これはあなたの可愛い女郎部屋を飾るためです」

「どうも有難う」とポールがあまり嬉しくもない様子で言った。デュブロイユがこの彼女のアトリエ風の部屋を女郎部屋などと称ぶのが彼女は不愉快だったのだ。彼に言わせれば、それはこの部屋にこんなにくさん鏡があり、赤い壁紙が張りめぐらされているためだった。彼はおもむろに部屋を見廻した。「これを中央梁に吊るそう。寄生木よりずっと綺麗になりますよ」

「でもわたくし寄生木が好きなんです」とポールがきっぱりと言った。

「寄生木っていう奴は間が抜けてますよ。丸くって、古臭いですよ。第一それは寄生的存在ですからね」

「甘唐辛子は階段の手摺に掛けたらいんじゃない？」とアンヌが取りなした。

「梁のほうがずっといいがな」とデュブロイユが言った。

「でもわたくし、寄生木と柂は譲れないわ」とポール。

「いや、結構、結構。ここはあなたのお家ですからね」とデュブロイユが言って、ナディーヌを手招きした、

「手伝ってくれ」

アンヌは豚肉の油煮や、バター、チーズ、菓子などの包みをほどこした。「これはパンチのためよ」と、彼女はラム酒の壺を二本食卓の上に置きながら言った。それか

らポールの手に包みを一つ渡して、「これはあなたへのプレゼント。これは、あなたへ」と彼女はアンリに白色粘土製のパイプを差し出しながら言った。それは鳥の爪が小さな卵を掴んでいる恰好に彫刻されたものだった。十五年前にルイが吸っていたのと全く同じ型のパイプだった。

「こいつは素敵だ！ ぼくは十五年も前からこれとそっくりのパイプを欲しいと思っていましたよ。どうしてわかったんですか？」

「あなたが何時かわたしに、そうおっしゃったんですもの」

「まあ、お紅茶が一キロも！ 有難いわ」と、ポールが感激の声を放った、「なんていい匂いでしょう！ 真物のお紅茶ね」

アンリがパンを切り始め、アンヌがそれにバターを塗りつけ、ポールはそれに豚肉の油煮をのせ始めたが、その間も、力一杯金槌で釘を打ちつけているデュブロイユのほうを時々心配げに眺めていた。

「お宅に、一つ欠けているものがあるのをご存じですか？」と彼はポールに向って叫んだ、「大きなクリスタルのシャンデリヤですよ。そのうち一つ探して来て上げ

ましょう」

「でも、わたくし、そんなもの欲しくありませんわ！」
デュブロイユは甘唐辛子の房を全部懸けおわって、階段から降りて来た。

「悪くないね」と彼は自分の仕事の結果をもっともらしく眺めながら言った。それから食卓の傍へ行き、香料類の入った小袋を開いた——もう何年も前から彼は機会がある毎に、ハイチでその調合法を覚えて来た、この混合酒を作製する習わしだった。階段の手摺に身をもたせながら、ナディーンは最前から甘唐辛子を噛んでいた。十八歳になる彼女は、フランス人やアメリカ人の寢床を幾つか放浪して来たにもかかわらず、まだほんの、お転婆盛りの少女に見えた。

「おいおい、装飾品を食べては困るね」とデュブロイユが彼女に大声で言った。それから、ラム酒の壘を一本サラダ鉢に空けながら、アンリに話しかけた。

「一昨日、サマゼルに会ったが、おれたちと一緒に行動することを望んでいるようだから、おれはとても喜んでるんだ。明日の晩、空いてるかい？」

「十一時までは新聞社にいなければなりません」

「じゃ十一時に寄ってくれ。皆で当面の仕事について論

議することになってるんだが、おれはぜひ君にも出席してもらいたいんだ」

アンリは微笑した、「何故そんなにぼくの出席をお望みなんですか？ ぼくにはよくわかりませんがね」

「君がおれと一緒に仕事してくれることはサマゼルに言っているんだが、君が列席してくれば一層効果があると思うんだ」

「サマゼルのような男がぼくのことなんかをそう重要視するとは思えません」がね」と、相変らず微笑を続けながらアンリが言った、「ぼくが政治的な人間ではないということは彼はよくわかってる筈ですからね」

「いや、彼もおれと同意見で、政治を政治家に任せて置いてはいけな」と考えているよ」とデュブロイユが言った、「是非来てくれ、ほんのちょっとした間でいいから。サマゼルの周囲には優秀なグループがついているんだ、若い青年たちだ。我々にはそういう連中が必要だからね」
「あなた方ったら、また政治の話をするおつもりなんですか」とポールが機嫌を悪くした声で口をはさんだ、
「今晚はお祝いの晩よ」

「それがどうしたんです？」とデュブロイユが言った、
「いったい、祝い事の日には自分の関心事についてしゃ